

# 自立型高齢者学習グループの可能性と課題

——大阪府富田林市「くすのき塾」16年の成果から——

粟田 昌・中道 厚子

高齢者がいきいきと生活し、いわゆる自己実現の場を築くための試みが各地で盛んに行われている。ここでは、その一つとして、大阪大谷大学のある大阪府富田林市を拠点に活動する「特定非営利活動法人高齢者大学シニア富田林くすのき塾」（以下「くすのき塾」）を取り上げる。同団体は2001（平成13）年、同市在住の高齢者数人によって自主的に創設され、行政などの支援をほとんど受けることなく趣味・教養の講座を多数展開し、数年のうちに数百人の会員を擁して今日まで継続されている。

高齢者の手による生涯学習活動の成功事例として、その組織と運営のあり方について考察し、超高齢社会を迎えた現代日本で、何が求められているのかを探りたい。

## I 高齢者の生涯学習の現状と課題

### 1. 超高齢社会を迎えて

#### (1) 全国的な状況

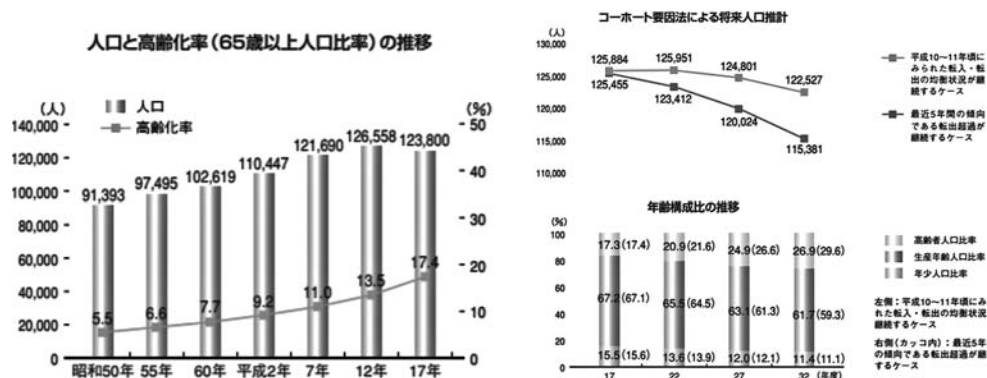
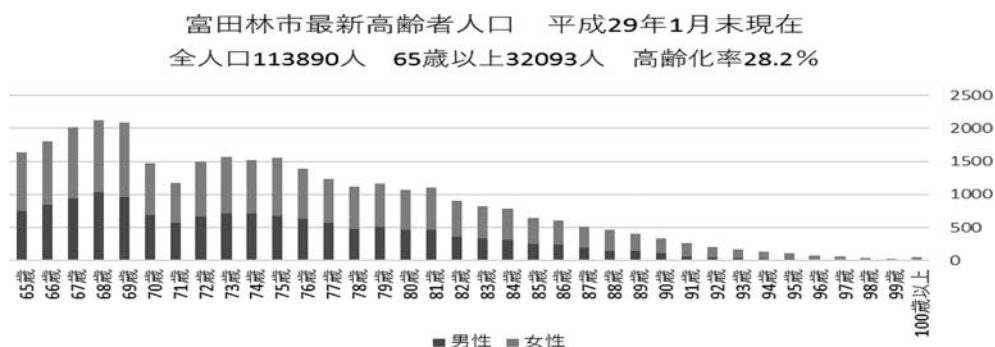
わが国の高齢化は急速に進んでいる。総人口に占める65歳以上人口の割合（高齢化率）は、2000（平成12）年には16.7%であったが、2005（平成17）年には19.5%で世界第1位となり、2016（平成28）年には26.7%に達している。さらに2060年には高齢化率は39.9%に達すると推定され、少子化の中、増加する高齢者のあり方は、わが国の未来をも左右する社会の重要課題となっている。

#### (2) 富田林市の状況—人口と高齢化率

富田林市が次の10年に向けて、2007（平成19）年に策定した第4次総合計画の中に、富田林市の人口の変化が推計も含めて描かれている（図表1-1）。これを見ると富田林市の人口は、2000（平成12）年から2003（平成15）年までは、126,000人を超える人口のピークにあたり、その後は減少の一途をたどることがわかる。

富田林市のウェブサイトで公開されている人口統計によると、平成29年1月末現在の65歳以上の人口は、全113,890人中32,093人となっており、高齢化率28.2%にのぼる（図表1-2）。この数字は、2016（平成28）年度のわが国全体の高齢化率26.7%を上回っている。

以上から、2007（平成19）年度の時点で市が予測した以上の速さで、富田林市の人口減少と

図表 1-1 富田林市の人口と高齢化率『富田林市第4次総合計画』2007(平成19)年より<sup>(1)</sup>

図表 1-2 富田林市の高齢者人口の現状 富田林市 HP 人口統計データより筆者作成

高齢化が進行していることがわかる。

### (3) 富田林市の状況—高齢者の意識

第5次総合計画策定のため富田林市は、2016(平成28)年6・7月に市民アンケートを実施し、9月に『富田林市新たな総合ビジョンの策定に向けた市民アンケート調査報告書』を作成した。18歳以上の市民3,000人に実施し回収率47.9%のこのアンケートは、60歳代以上の回答者が585人で全体の40.7%を占めている。

この調査結果のうち、年齢別に結果を出している項目を中心に、高齢者世代の意識を整理する(図表1-3)。

問8「あなたは富田林市が好きか」・問9「良い点」・問10「悪い点」については、高齢者世代に特化した大きな特徴は見られなかったが、問11「富田林市に住み続けたいか」については、「ずっと住み続けたい」と「事情が許す限り住み続けたい」を合わせると60代で74.8%、70代で78.5%が富田林市に住み続けることを希望しており、全体69.0%より高い割合となっている。

問12は「富田林市のまちづくり」について多方面から市民の意識を問うているが、残念ながら年齢別の結果は添えられていなかった。分析コメントに表れている世代の特徴を整理すると、

問8 あなたは富田林市が好きですか	大好き 好き ふつう きらい 大嫌い無回答
全体	ふつう 46.4 好き 39.8 大好き 8.4
60歳代[250]	ふつう 49.2 好き 41.2 大好き 4.8
70歳代以上[335]	ふつう 42.7 好き 42.7 大好き 9.9
問9 - 1 富田林市の良い点について (3つまで)	自然環境がよい 歴史・文化遺産が豊富 通勤・通学に便利 買物など日常生活の利便性がよい 商業地域・施設へのアクセスがよい 住宅購入・賃貸の価格相場が手ごろ 病院や福祉施設が充実している 子育て・保育環境がよい
全体	自然災害が少ない 58.9 自然環境がよい 53.2 住環境が落ちている 31.0 買物など日常生活の利便性がよい 22.3 治安がよい 20.7
60歳代[250]	自然災害が少ない 69.6 自然環境がよい 58.4 住環境が落ちている 36.4 買物など日常生活の利便性がよい 25.2 治安がよい 20.8
70歳代以上[335]	自然災害が少ない 67.8 自然環境がよい 54.9 住環境が落ちている 31.0 買物など日常生活の利便性がよい 24.8 治安がよい 22.4 病院や福祉施設が充実している 20.0
問10 富田林市の悪い点について (3つまで)	自然がない 歴史・文化遺産の活用が不十分 通勤・通学に不便 買物など日常生活の利便性がよくない 商業地域・施設へのアクセスがよくない 住宅購入・賃貸の価格相場が高い 病院や福祉施設がでない 子育て・保育環境がよくない 教育環境がよくない 治安がよくない 自然災害が多い 住環境がさわがしい 人付き合いが難しい 都市イメージがよくない その他 無回答
全体	買物など日常生活の利便性がよくない 35.6 商業地域・施設へのアクセスがよくない 33.8 通勤・通学に不便 26.4
60歳代[250]	買物など日常生活の利便性がよくない 38.8 商業地域・施設へのアクセスがよくない 34.4 病院や福祉施設が少ない 23.6 都市イメージがよくない 19.2
70歳代以上[335]	買物など日常生活の利便性がよくない 45.1 商業地域・施設へのアクセスがよくない 29.3 病院や福祉施設が少ない 21.5 人付き合いが難しい 22.7
問11 あなたは将来も富田林市に住み続けたいと思いますか	ずっと住み続けたい 仕事や家庭の事情が許さざり住み続けたい 市外に引っ越したい わからない 無回答
全体	仕事や家庭の事情が許さざり住み続けたい 37.3 ずっと住み続けたい 31.7 わからない 20.7
60歳代[250]	ずっと住み続けたい 41.2 仕事や家庭の事情が許さざり住み続けたい 33.6 わからない 19.6
70歳代以上[335]	ずっと住み続けたい 60.9 仕事や家庭の事情が許さざり住み続けたい 17.6
問12 あなたは富田林市のまちづくり項目→高齢者の結果(抜粋)	40歳代、50歳代 [行財政運営の効率化]重要度高 50歳代、60歳代 [高齢者が暮らしやすいまちづくり][障がい者(児)が暮らしやすいまちづくり]満足度低 [バリアフリー化などの交通環境の整備]満足度低 [平和に関する意識啓発][男女共同参画社会の実現に向けたまちづくり]満足度低 [行政職員の市民意識の理解を促すしくみづくり]は、30歳代～60歳代で満足度低 60歳代 [行財政運営の効率化][公共施設等の計画的な維持管理や更新]満足度が低 [市民生活に必要な行政情報の公開]は10歳代と共に重要度高 70歳代以上 [健康診断などの保健予防の充実]の満足度特に高 [環境・都市基盤]各項目とも重要度高 [男女共同参画社会の実現に向けたまちづくり]10歳代、20歳代と共に重要度高 [行政職員の市民意識の理解を促すしくみづくり][市民と行政の協働を推進するしくみづくり]重要度高

富田林市の高齢者層は、行政のあり方（運営・管理・協働等）・高齢者のくらしやすいまちの状況への満足度が低く、行政情報公開や男女共同参画への関心が高いことがわかる。

問14～16はまちづくりへの意識を問う項目で、60代と70代の状況に違いが見られる。例えば、問14の「まちづくりに参加したいか」については、60代は「参加したくない」をトップに全体平均に近い結果となっているが、70代は「参加したくてもできない」がトップとなっている。70代は、60代のように参加自体を拒否するのではなく、参加する意思はあっても年齢が上がるごとに変化する心身の影響等から参加できない状況が想定される。

問15は参加の手段を聞いているが、ここでも問14と同様に全体と60代のトップが「アンケ

問 14 あなたは富田林市のまちづくり（市政や地域活動）に参加したいと思いますか。	参加したい 参加したくてもできない 参加したくない 無回答
全体	参加したくない38.4 参加したくてもできない35.1 参加したい21.9
60歳代[250]	参加したくない40.0 参加したくてもできない34.4 参加したい24.4
70歳代以上[335]	参加したくてもできない43.3 参加したくない26.9 参加したい17.3
問 15 あなたが富田林市のまちづくりに参加するなら、どのような手段	1 シンポジウムなどの意見交換会 2 ワークショップへの参加 3 市の説明会や意見交換会への参加 4 行政諸分野の審議会や委員会への公募委員としての参画 5 ハブリックコメント制度を活用した意見の提出 6 アンケート調査への協力 7 町会や自治会をはじめとする地域コミュニティ活動への参加 8 ボランティアやNPO活動への参加 9 道路や公園の清掃・美化活動などのアドプトプログラムへの参加 10 趣味や経験を活かした指導や貢献 11 その他 無回答
全体	6 アンケート調査への協力48.9 7 町会や自治会をはじめとする地域コミュニティ活動への参加34.3 10 趣味や経験を活かした指導や貢献27.4 9 道路や公園の清掃・美化活動などのアドプトプログラムへの参加26.5 8 ボランティアやNPO活動への参加25.4
60歳代[147]	6 アンケート調査への協力43.5 7 町会や自治会をはじめとする地域コミュニティ活動への参加40.1 9 道路や公園の清掃・美化活動などのアドプトプログラムへの参加32.7 10 趣味や経験を活かした指導や貢献27.9 8 ボランティアやNPO活動への参加26.5
70歳代以上[203]	7 町会や自治会をはじめとする地域コミュニティ活動への参加43.8 6 アンケート調査への協力39.9 9 道路や公園の清掃・美化活動などのアドプトプログラムへの参加24.6 8 ボランティアやNPO活動への参加19.7 10 趣味や経験を活かした指導や貢献19.2
問 16 参加したくてもできない、参加したくない理由について	仕事などのため時間がない 身近な場所での機会がない 自分や家族の都合（体調がすぐれない、家族の介護、子どもの世話等） 参加したい活動の情報が無い 内容が難しい 関心・興味がない その他 無回答
全体	仕事などのため時間がない43.1 自分や家族の都合（略）36.6 参加したい活動の情報が無い22.9 関心・興味がない20.9
60歳代[186]	自分や家族の都合（略）40.9 仕事などのため時間がない32.3 参加したい活動の情報が無い24.2 身近な場所での機会がない17.7 関心・興味がない17.2
70歳代以上[235]	自分や家族の都合（略）53.6 その他16.2 身近な場所での機会がない15.7 参加したい活動の情報が無い14.5
問 17 あなたは、10年後の富田林市の理想像	1 若い世代が安心して子育てできるまち 2 学校教育や生涯学習など、学習環境が充実したまち 3 健康でいきがいをもって暮らせるまち 4 高齢者や障がい者が安心して暮らせるまち 5 水とみどりを活かしたうるおいのあるまち 6 防犯、防災などの危機管理が行き届いたまち 7 道路網や公共交通網などが充実した移動しやすいまち 8 居住環境に優れた生活しやすいまち 9 産業が活発にぎわいのあるまち 10 商業施設が多くあり、買い物に便利なまち 11 観光などのために、多くの人が訪れる魅力あるまち 12 一人ひとりの人権が尊重されるまち 13 人や地域が互いに連携し、支えあうまち 14 市民協働や住民活動が活発なまち 15 将来にわたって健全な行財政運営を行うまち 16 その他 無回答
全体	1 若い世代が安心して子育てできるまち47.7 4 高齢者や障がい者が安心して暮らせるまち39.8 6 防犯、防災などの危機管理が行き届いたまち27.3 3 健康でいきがいをもって暮らせるまち24.3 10 商業施設が多くあり、買い物に便利なまち21.6 8 居住環境に優れた生活しやすいまち21.5
60歳代[250]	1 若い世代が安心して子育てできるまち48.0 4 高齢者や障がい者が安心して暮らせるまち45.6 3 健康でいきがいをもって暮らせるまち28.0 6 防犯、防災などの危機管理が行き届いたまち22.8 8 居住環境に優れた生活しやすいまち22.0 10 商業施設が多くあり、買い物に便利なまち21.2 7 道路網や公共交通網などが充実した移動しやすいまち18.8
70歳代以上[335]	4 高齢者や障がい者が安心して暮らせるまち51.9 1 若い世代が安心して子育てできるまち43.3 3 健康でいきがいをもって暮らせるまち31.0 6 防犯、防災などの危機管理が行き届いたまち24.5 15 将来にわたって健全な行財政運営を行うまち20.9 10 商業施設が多くあり、買い物に便利なまち18.8

図表 1-3 「富田林市新たな総合ビジョンの策定に向けた市民アンケート調査報告書（平成 28 年 9 月）」から高齢者の意識をみる

ート調査への協力」で、70代では「町会や自治会をはじめとする地域コミュニティ活動への参加」となっている。70代では、個人的な対応で済むアンケートよりも町会や自治会への参加の意欲が感じられる。

問 16 の「参加したくてもできない理由」では、全体のトップは「仕事などのため時間がない」であるが、60代・70代とも「自分や家族の都合（体調がすぐれない、家族の介護、子ども

の世話等)」がトップにあがっている。注目したいのは、「参加したい活動の情報がない」「身近な場所での機会がない」を合わせると 60 代で 34.9%・70 代で 30.2% が、意欲がありながら活動できていない状況がある。早急に、こうした層への情報や場の提供の仕組みを工夫・改善しなければならない。

問 17 は、「10 年後の富田林市の理想像」を聞いている。ここでも 60 代は全体と同様「若い世代が安心して子育てできるまち」がトップで、2 位に「高齢者や障がい者が安心して暮らせるまち」があがっているが、70 代は「高齢者や障がい者が安心して暮らせるまち」がトップで、2 位に「若い世代が安心して子育てできるまち」となっている。70 代の結果は、1 位は高齢者特性が強まる世代からの切実な声と考えられるが、2 位に若い世代が意識されている。全体も高齢者層も、1 位・2 位の中でお互いの世代を意識しつつ、あるべきまちを描いているところは、富田林市の今後のまちづくりにとって大きな意味がある。

## 2. 変わる高齢者観

2017（平成 29）年 1 月 5 日、日本老年学会<sup>(2)</sup>から高齢者を 75 歳以上にする提言がなされ、様々な議論を呼んでいる。提言の概要を抜粋して紹介する。

「わが国を含む多くの国で、高齢者は暦年齢 65 歳以上と定義されています。しかし、この定義には医学的・生物学的に明確な根拠はありません。」「近年の高齢者の心身の健康に関する種々のデータを検討した結果、現在の高齢者においては 10～20 年前と比較して加齢に伴う身体的機能変化の出現が 5～10 年遅延しており、「若返り」現象がみられています。」

「これらを踏まえ、本ワーキンググループとしては、65 歳以上の人を以下のように区分することを提言したいと思います。」

65～74 歳 准高齢者 准高齢期 (pre-old)

75～89 歳 高齢者 高齢期 (old)

90 歳～ 超高齢者 超高齢期 (oldest-old, super-old)」

「高齢者の定義と区分を再検討することの意義は、(1) 従来の定義による高齢者を、社会の支え手でありモチベーションを持った存在と捉えなおすこと、(2) 迫りつつある超高齢社会を明るく活力あるものにする事です。」<sup>(3)</sup>

現在、わが国の社会保障や雇用制度は 65 歳以上を「支えられる側」として設計されていることから、今後、多方面にわたって議論や検討が必要となる。おそらく、今後、そのあり方が変更されるであろう。

前項で取り上げた富田林市のアンケート結果からも、60 代と 70 代で違いが見られた。高齢者観の研究<sup>(4)</sup>でも、高齢者以外の世代から高齢者に対して偏見があることはもちろん、高齢者自身が「高齢者とは〇〇できないもの」と思い込んでしまう状況が指摘されている。

少なくとも、高齢者の定義は固定されたものではない。高齢者を取り巻く状況が変化していることをプラスに活かし、自らの思い込みで高齢者の限界を作ることだけは避けたい。

### 3. 生涯学習社会という概念の変化

生涯学習という概念が登場する以前、教育の対象は子どもが主であり大人の学びは後回しにされてきた。しかし、現代の急激な変化には、学校の学びだけでは対応できない。大人の学びの重要性が増す中、1965（昭和40）年にP. ラングランがユネスコの成人教育推進国際委員会で現在の生涯学習につながる生涯教育を提言した。「学びは子どものもの」が常識であった時代に「大人も学んでよい」のだという新しい考え方は、世界中に広まり、現在にいたっている。

この概念は、我が国へは、ラングランの友人あり国際会議に同席していた心理学者波多野完治によって「生涯教育」<sup>(5)</sup>として伝えられ、後に「生涯学習」として定着した。

「生涯学習社会」は、だれもが生涯のいつでも、どこでも、なんでも学ぶことを可能とする社会のことであり、2006（平成18）年に改正された新教育基本法第3条には、わが国が生涯学習社会の実現を目指すことが明記されている。

初期の生涯学習は、学習者個人の自己実現につながる学びが重要視され、人々は自らの「学びがい」「生きがい」を求めて、公民館やカチルチャーセンターに集まった。現在は、2008（平成20）年の中央教育審議会答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～」<sup>(6)</sup>が示すように、個々の学びを個々で終わらせることなく、循環向上させることが求められている。本論で取り上げる「くすのき塾」の16年は、まさにその循環の創造の実践と言える。

## II くすのき塾の16年から

### 1. くすのき塾の概要

#### (1) 誕生の経緯

##### ①リーダー養成講座

1990年後半から2000年前後は、いわゆる「団塊の世代」のサラリーマンが一斉に定年退職を迎える時期で、退職後の元気なシニアの受け皿をどう整備するかについて、さまざまな分野で対策が求められた。地方都市においても行政が対応すべき問題との認識があった。2000（平成12）年、その一環として大阪府では、シニア世代の学習活動においてリーダーとなる人材を育成する事業を企画し、市町村に実施を働きかけた。富田林のほか、堺、茨木、八尾、枚方の計5市がこれを受け入れて講座を開催した。外部からの力が作用した結果の講座開催ではあったが、それは各自治体が対応を迫られていた課題でもあった。

府からの呼びかけにしたがって富田林市で開催されたシニアリーダー養成講座は、図表2-1のように、実際にイベントを企画・立案・実施することと広報（リーフレット作成）を体験する内

## 富田林市シニアリーダー養成講座の概要

名称：シニアリーダー養成講座  
 主催：富田林市と大阪府地域福祉推進財団の共催  
 日程：2000年（H12）年10月2日～（全4日）  
 カリキュラム：第1日＝地域イベント活動計画の方法  
                   第2日＝現地の下見  
                   第3日＝イベント広告・案内方法（原稿作成）  
                   第4日＝実践企画と評価  
 講師：サラリーマン OB 運営委員会より派遣  
 担当課：富田林市健康福祉部福祉課・市教育委員会社会教育課

図表 2-1 富田林市シニアリーダー養成講座の概要

## リーダー養成講座修了生が企画・実施したイベント

第1班＝「富田林の歴史と古寺の賑わい」……参加36人  
 第2班＝「桜の下で富田林の文化遺産と散歩」……参加35人  
 第3班＝「富田林の生活と環境見て歩き」……参加28人

図表 2-2 リーダー養成講座修了生が企画・実施したイベント

容で、定員を15人とし4日間にわたって実施された。単なる座学ではなく、現在さかんに言われている学習者が主体的に学びに関わるアクティブラーニングの手法が取られていることにも注目したい。男性10人・女性5人の計15人がこの講座を受講した。

富田林市は、大阪府南東部の地方都市。高度経済成長期以降、西部丘陵地帯に住宅都市整備公団（現UR）のニュータウン開発が進み、人口が増加した。2017年9月30日現在、人口113,173人、世帯数50,726となっている。現在は大阪市・堺市、その他へ通勤する世帯が多いベッドタウンという色彩が濃い。この人口増加の間に、公民館3館、図書館2館などを中心に社会教育行政の体制が整えられてきた。

講座中の実習として3班に分かれてそれぞれ企画されたイベントは、その後実際に富田林市民を対象に実施されることとなり、多くの参加者が集まった（図表2-2）。

この講座開催の趣旨は、第1に高齢者の学習活動を推進するリーダーの養成であったが、第2にはその人たちが自らの力で具体的な実践を行うことが期待された。このことは講座の案内文書に示され、開講時にも主催者側から受講生に伝えられた。講座の中でも、自主的に学習の場を企画し運営していくことが勧められ、全国の先進的な事例も紹介された。

ここで主催者が意図していた「リーダー」とは、個々の講座やイベントを企画・実施するといった学習グループの担い手だった。ところがその後、講座修了生たちはこの期待を超えたレベルを目指して行動を起こすことになる。

## ②自発的な高齢者大学設立

イベントを企画し実施することを通して、学びを提供する側のスキルを身につけた参加者15人の間で、その後の活動についての話し合いがあり、自分たちの手で高齢者大学を設立しようとの話が持ち上がった。行政側から具体的な支援を一切期待できないことが判明した時点で「やっ

シニア富田林くすのき塾設立基本方針	
設立目的	高齢者の健康維持、生きがいづくりを目的として新しい発想での遊び心の生涯学習塾とする。
運営方針	<ol style="list-style-type: none"><li>1. 教えたい、学びたい、運営したい気持ちがある高齢者であれば誰でも参加できる。但し、政治、宗教、営利を目的としないこと。</li><li>2. 哲学から漬物の漬け方まで講座の範囲、種類に制限は設けない。</li><li>3. 会員制とし、年額 2,000 円とする。</li><li>4. 受講参加料（資料経費）は誰でも参加しやすい実費価格相当とする。</li><li>5. 市場原理を導入する。</li><li>6. 講座運営は、高齢者の講座参加者みんなが支えあい協力して運営する。</li></ol>

図表 2-3 くすのき塾設立基本方針（同塾資料から筆者抜粋）

ていられない」と去る者もいた一方で、「ナニクソ精神」で残ったメンバーがくすのき塾誕生に向けて動き出すこととなる。

2001（平成 13）年 7 月には「高齢者大学設立準備会」が発足した。その後、自主的な活動には無理があるとして代表者が辞任するなどの曲折があったが、中心メンバー 8 人の体制が整い、名称は「シニア富田林くすのき塾」と決定し、11 月 1 日に発足した。

発足にあたってこのメンバーが打ち立てた方針（図表 2-3）には、この団体の活動理念がよく現れている。

### ③自主運営組織のメルクマール

富田林市では 1960 年代（昭和 30 年代後半）から、社会教育活動が活発だった。婦人会、子ども会、PTA、青年団など、いわゆる社会教育関係団体が早くから組織されて活動していたし、公民館の講座も多く生まれ、図書館も市民生活に根付いていた。

その一端を支えた社会教育主事・図書館司書という専門職が、行政組織の中に位置づけられていたことも見逃せない。戦後日本の教育復興施策として描かれた社会教育のプランが地方都市で着実に実現されてきた一つのモデルと言ってよいだろう。一般行政職とは別に専門職としての社会教育主事補の職員採用が、周辺都市ではすでになくなっていく中、富田林市では 1983（昭和 58）年まで行われた。

しかし、そのような社会教育施策で反省の一つとして、行政が団体活動の中に深く入り込み過ぎていたことが挙げられる。団体活動の円滑を期して、行政職員が団体の運営に関わりすぎる傾向は、富田林市に限らず多く見られたし、今もあると思われる。団体の役員がすべき書記や会計の仕事を行政職員が「事務局」という立場で肩代わりする。市役所側が案を出し企画し提示する内容を、団体側が承認し実行する関係が生まれ、定着する。その結果、団体の企画力・課題対応力は育成されず、行政の支援が打ち切られると、組織も活動も継続できなくなる、という実態があった。

そのような行政の姿勢に変化が見られ出したのは、生涯学習という概念が社会に広がり出した



時期と重なる。そこには、学習活動・市民活動の量的・質的發展とともに住民の側が活動の運営能力を高めたという側面とともに、行政側の財政事情が「過剰」サービスの提供を許さなくなった側面がある。また、自立に向かって団体を支援することなしに、行政が一律にサポートを切り捨てたことの問題点も指摘されなければならない。

以上のような背景から、シニアリーダー養成講座では修了後の活動を「自主的」に行うことが一つの命題として課されていた。その後、くすのき塾がその自主性を根底に据えて歩み続け発展していったことを考えると、この発足の時点が社会教育・生涯学習関係団体の活動のあり方にとって一つのメルクマールを示す時期であったと捉えられる。

#### ④行政による最低限の支援

自主的活動とは言うものの、くすのき塾の活動が軌道に乗るまでには、行政も最低限の支援を行っている。2001（平成13）年7月に、設立準備会から富田林市に3項目の支援を要望する文書が提出されたが（図表2-4）、市は制度上の制約の中でさまざまな工夫努力によってこれに応えた。

図表2-6は、講座修了生たちが設立を目指していた高齢者大学のイメージを行政内部に説明するため、市教育委員会社会教育課で作成された資料である。新しい発想、自主運営、ボランティアによる事務局などの考え方が見られ、旧来の社会教育関係団体とは一線を画した学習組織創造への意欲が読み取れる。

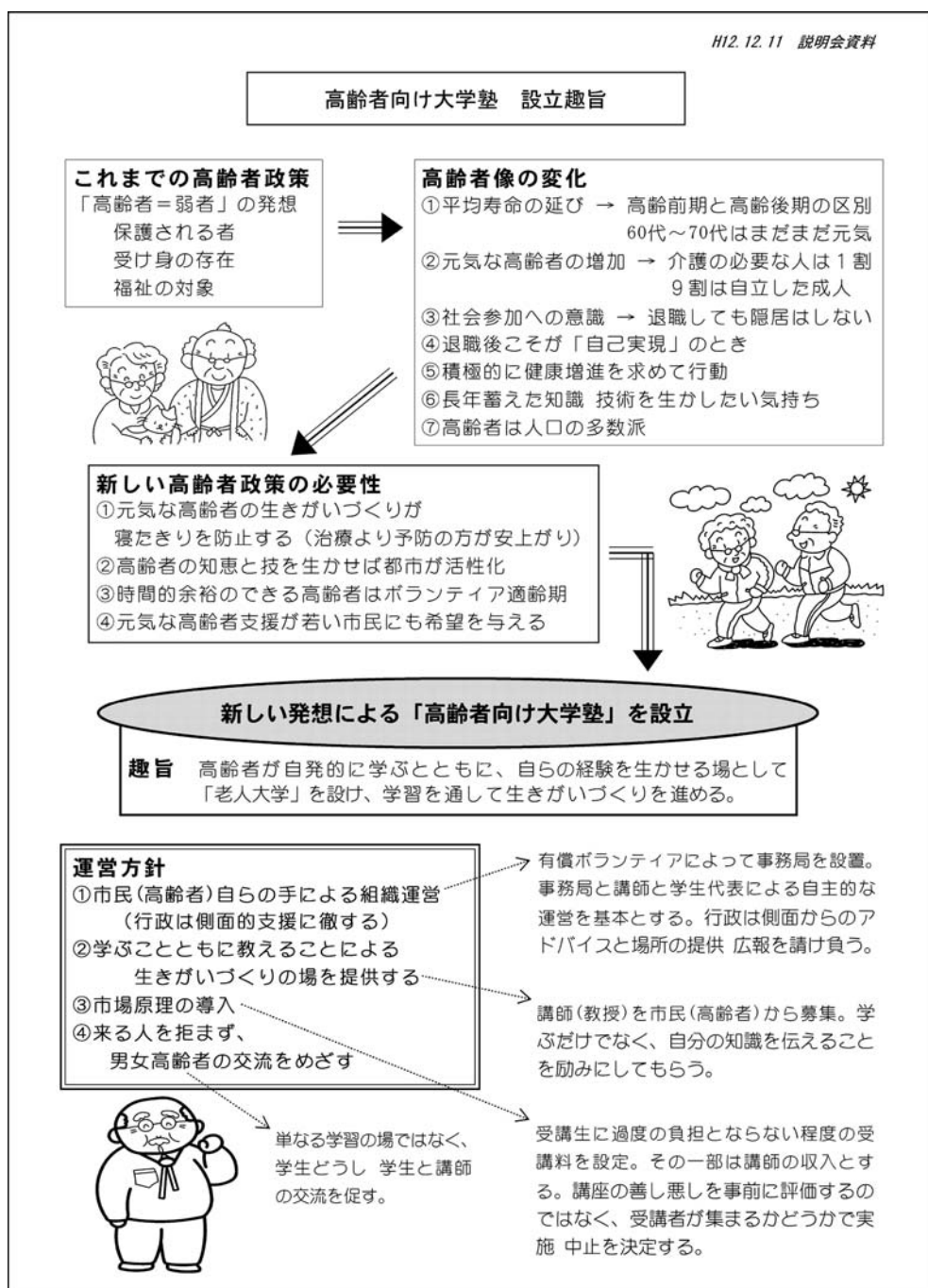
この頃、社会教育課では市の生涯学習推進構想を策定するにあたって全国各地の取り組み事例を集める中から静岡県清水市（現静岡市）の「清見潟大学塾」<sup>(7)</sup>（図表2-5）に注目し、担当職

高齢者大学設立準備会から富田林市長宛て「設立支援要望書」	
(2001年7月31日付)	
1.	拠点事務所を提供してほしい
2.	市広報誌に受講生募集記事を掲載してほしい
3.	講座の教室を提供してほしい

図表 2-4 くすのき塾から富田林市へり支援要望書

<p><b>清見潟大学塾とは</b></p> <p>1985（昭和60）年、清水市（現静岡市）教育委員会の支援のもとに設立された高齢者大学。同市内（現静岡市清水区）の公共施設を教室として各種講座を運営する。「遊び心で大学ゴッコ」をモットーに、高齢者を社会的弱者と位置づける視点に反発し、生涯学習を通じて市民の生きがい高め、健全なまちづくり・人づくりに貢献することを目指して設立された。</p> <p>資格や科目など無制限で教授を公募するが、受講者10人以上がなければ講座は継続できない。一方で受講者が増えれば教授の報酬がアップする「市場原理」を採用している。講座の内容と運営は、教授のパーソナリティーと受講生の自主性に任される。</p> <p>2013（平成25）年時点で137講座を開講し、講師数は86人（女性62人・男性24人）、塾生数はのべ2230人（女性83%・男性17%）となっている。一部の講座を除き、受講者に年齢制限を設けず、9歳から97歳までが学ぶ。</p>
---

図表 2-5 清見潟大学塾の概要（清見潟大学塾編「新静岡市発生涯学習20年」及び同塾ウェブサイトより抜粋）



図表 2-6 富田林市教育委員会社会教育課内部資料（2000 年 12 月作成）

員が公民館職員とともに現地視察に出かけている。この「大学塾」の取り組みはくすのき塾起ち上げに関わった人たちの間にも広く認識されるようになり、その後の組織作りのモデルとなっていた。

### ⑤担当課の調整

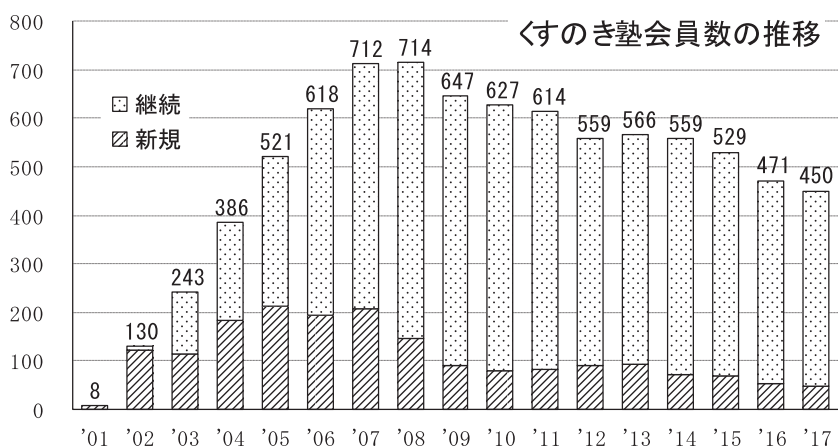
行政内部ではこのようにして産声をあげたくすのき塾をどこの課が受け持つか、という問題が発生していた。シニアリーダー養成講座は、府では高齢者施策を担う福祉部門の担当であったが、富田林市ではこの企画に着目したのが教育委員会社会教育部であったことから、社会教育課の主導で進められ、市長部局の健康福祉部福祉課がサブ的に運営に加わっていた。

その後、この2つの課の間で調整があり、くすのき塾が発足する時点では福祉課が主に担当することと決まった。しかし、くすのき塾役員たちは、事あるたびに社会教育課に足を運んで相談を持ちかけ支援を求めた。行政内の取り決めにかかわらず、くすのき塾の方では、柔軟に対応する社会教育セクションの特性を適確に察知し、うまく利用していた。

### (2) 活動経過

くすのき塾講座の仕組みは、教えたい人がナビゲーターと呼ばれる講師役・リーダーとなり講座を立ち上げ、受講者の一部がスタッフとして協力する形を取っている。どちらも有償である。内容を限定することなく教えられる人・教えたい人を募集し、役員が面接し、塾の理念・方針を説明して講座を開く。講座継続のための受講者は最低5人と定め、それが集まらなければ閉講という方式で、講座の種類と教室数が膨らんだ。その多彩さを役員たちは「哲学から漬物の漬け方まで」と表現した。くすのき塾は、誕生から数年で飛躍的に会員数を増やした。

しかし、順調に活動が広がったことが思わぬ反発も招いた。それは、公民館で、くすのき塾の講座が多く部屋を使用することにより、それまで活動していたグループが活動場所の確保に苦勞する事態が発生したことによる。ついには、市議員からくすのき塾に苦情が寄せられるまでに至った。その後、塾では公共だけでなく民間を含めたさまざまな施設を活用して活動場所を確

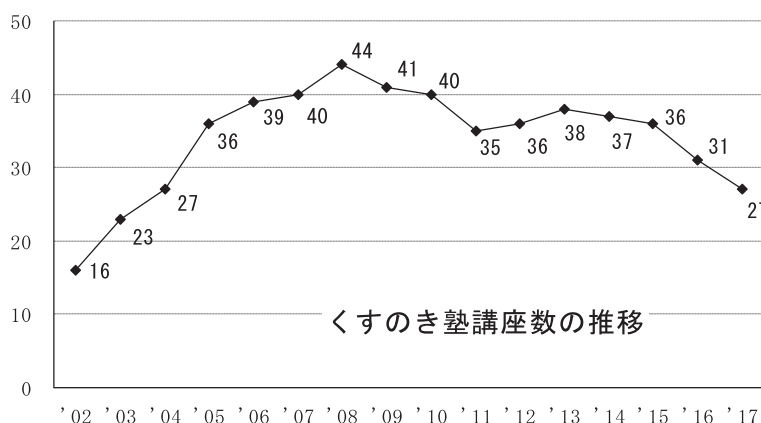


図表 2-7 くすのき塾会員数の推移（くすのき塾資料から筆者作成）

保している。その他に、こまめに官民の補助金を申請して活動資金を得るなど、さまざまな努力で障壁を克服して活動は継続されてきた。

この間の主な活動、トピックを列挙する。また、発足から後の会員数、講座数、財政状況について、それぞれの推移を図表 2-7 から図表 2-10 で表す。

・2002（平成 14）年 5 月、くすのき塾開講記念講演会開催。会員の医学博士による講演「ビ



図表 2-8 くすのき塾講座数の推移（くすのき塾資料から筆者作成）

### くすのき塾財政状況の推移(2001年～2008年)

1. 活動実績表		2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年
収入	会費(入会金・年会費)	16,000	264,000	357,000	594,000	734,000	814,000	919,000	863,000
	講座受講料(塾運営費含む)	0	702,300	1,697,950	3,402,200	4,486,000	4,555,100	4,927,700	5,924,000
	イベント参加料(協賛広告・塾運営費)	10,493	726,600	578,700	458,500	1,205,100	1,623,100	1,789,750	1,870,700
	助成金、その他収入	67,740	51,010	131,935	329,566	376,534	353,150	391,989	284,353
	計	94,233	1,743,910	2,765,585	4,784,266	6,801,634	7,345,350	8,028,439	8,942,053
支出	人件費(謝金・旅費交通費)	0	142,030	269,740	600,317	3,537,301	4,115,831	4,786,401	4,358,138
	借室料(含む光熱費)	0	0	0	0	45,500	275,795	948,254	2,377,880
	保険料	0	3,010	18,750	109,393	71,501	219,594	215,020	226,789
	事務用品費	723	83,526	162,221	129,551	350,511	304,440	369,531	329,583
	広報費	10,736	112,522	109,773	197,005	134,820	144,005	314,355	209,059
	その他諸経費	0	829,007	1,576,393	2,651,514	956,312	788,111	965,230	1,085,503
	管理費	9,975	0	72,938	82,494	302,574	441,548	494,015	441,730
計		21,434	1,170,095	2,209,815	3,770,274	5,398,519	6,289,324	8,092,806	9,028,682
差引残高		72,799	573,815	555,770	1,013,992	1,403,115	1,056,026	▲ 64,367	▲ 86,629
2. 財産目録									
資産	現金・預金		716,614	1,201,823	2,493,509	3,664,787	4,936,683	3,564,334	3,941,473
	備品		0	223,561	141,067	277,800	175,292	940,427	681,359
	その他固定資産		0	0	0	0	0	0	0
	保証金		0	0	0	0	0	300,000	300,000
	その他流動資産		0	0	0	91,906	196,905	432,520	277,566
計			716,614	1,425,384	2,634,576	4,034,493	5,308,880	5,237,281	5,200,398
負債	未払い費用		0	31,000	88,200	0	45,000	42,600	183,433
	預かり金		0	0	0	69,002	77,363	65,131	89,944
	計		0	31,000	88,200	69,002	122,363	107,731	273,377
正味財産合計			646,614	1,202,384	2,216,376	3,619,491	4,675,517	4,611,150	4,524,521

図表 2-9 くすのき塾財政状況の推移 2001 年～2008 年（くすのき塾資料から筆者作成）

## くすのき塾財政状況の推移(2009年～2016年)

1. 活動実績表		2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年
収入	会費(入会金・年会費)	738,000	707,000	696,000	649,000	660,000	630,000	599,000	524,000
	講座受講料(塾運営費含む)	5,568,200	4,526,100	4,646,900	4,888,700	5,011,000	4,538,000	4,645,000	4,771,900
	イベント参加料(協賛広告・塾運営費)	1,266,300	1,344,000	1,256,601	515,200	431,400	565,690	581,630	619,945
	助成金、その他収入	943,268	147,110	1,235,301	350,052	380,769	263,999	273,603	182,464
	計	8,515,768	6,724,210	7,834,802	6,402,952	6,483,169	5,997,689	6,099,233	6,098,309
支出	運営費	人件費(謝金・旅費交通費)	3,717,608	2,915,362	2,815,239	2,808,478	3,015,256	2,627,923	2,725,928
		借室料(含む光熱費)	2,522,840	2,497,928	2,141,946	2,187,744	2,285,037	2,123,120	2,180,318
		保険料	200,080	171,470	144,811	113,048	189,650	175,234	162,547
		事務用品費	267,230	141,174	178,633	225,964	198,336	65,238	83,325
		広報費	203,695	11,900	143,895	224,900	174,080	132,757	397,462
		その他諸経費	717,229	941,529	704,611	323,361	473,200	590,023	619,717
	管理費		333,959	403,744	580,491	622,239	447,410	297,619	281,240
		計	7,962,641	7,083,107	6,709,626	6,505,734	6,782,969	6,011,914	6,188,538
	差引残高		553,127	▲ 358,897	1,125,176	▲ 102,782	▲ 299,800	▲ 14,225	▲ 89,305
								▲ 353,625	
2. 財産目録									
資産	現金・預金	4,437,878	4,110,555	4,489,625	4,605,042	4,505,563	4,537,379	4,327,663	4,049,283
	備品	513,793	381,568	1,017,604	817,169	601,839	424,718	560,052	415,594
	その他固定資産	0	0	0	0	0	0	0	0
	保証金	300,000	300,000	300,000	300,000	300,000	300,000	300,000	300,000
	その他流動資産	408,066	499,656	507,849	573,165	556,233	614,215	601,539	607,190
	計	5,659,737	5,291,779	6,315,078	6,295,376	5,963,635	5,876,312	5,789,254	5,372,067
負債	未払い費用	45,400	0	0	0	24,830	0	0	0
	預かり金	71,689	61,978	54,901	58,981	62,460	44,192	52,439	55,877
	計	117,089	61,978	54,901	58,981	87,290	44,192	52,439	55,877
正味財産合計		5,077,648	4,718,751	5,843,927	5,741,145	5,441,345	5,427,120	5,337,815	4,984,190

図表 2-10 くすのき塾財政状況の推移 2009 年～2016 年（くすのき塾資料から筆者作成）

タミンと健康について」など（講師謝礼なし）。公民館ホール満席の盛況。

- ・同年、大阪ガスと関西電力の無料バスを利用し、同社施設見学と組み合わせてバスツアーを計 5 回実施。多くの参加者を集め、この収益により活動資金を蓄える。
- ・同年 6 月から会報発行。全会員に配付のほか、公共施設に設置。現在も年 2 回発行を継続。
- ・2003（H 15）年 2 月、NPO 設立総会開催し登記手続き。7 月、認証。
- ・同年 9 月、活動発表会「第 1 回シニアのお祭り」開催。現在まで毎年開催。
- ・2007（H 19）年 7 月、ニッセイ財団より「生き生きシニア活動」として顕彰される。
- ・2008（H 20）年 9 月時点で会員数 718 人。開設講座数 40。
- ・同年 10 月、市内ショッピングモール内に 1 室を賃借し常設の専用教室を確保。
- ・2015 年 8 月～12 月、富田林市高齢介護課と共同で「終活講座～あなたは安心して旅立てますか？」を開催。全 6 回の講座にのべ約 300 人が参加。
- ・2016 年 9 月、さまざまな講座から集まった会員による劇団「ピンコロ座」が第 1 回公演。その後、外部の催しにも多数出演している。

## (3) 現状

## ①会員数・講座数

2017（平成 29）年 10 月 4 日現在、くすのき塾の会員数は 450 人（男性 102 人、女性 348 人）である。同年 8 月現在、主催講座は 16 種類・計 27 教室で（図表 2-11）、このほかに各講

くすのき塾主催講座（2017年8月現在）
（カッコ内は開講教室数、1は省略）
陶芸（3）、手編み、歴史、川柳と遊ぼう、言の葉遊び（朗読）、歌謡教室（3）、民舞踊、歌声教室（3）、気功、太極拳、3B体操（2）、ヨガ（3）、ハワイアンフラ（2）、実用習字、健康麻雀（2）、ニシキデ教室（介護講座）

図表 2-11 現在のくすのき塾主催講座

座受講生が自主的に運営するサークル5、講師が塾の支援のもとに開くカルチャー教室6がある。

会員数、講座数とも発足から急拡大し、数年間は増加が続いたが、その後、頭打ちとなり、ここ数年は減少が続いている。長年続いてきた講座の中に講師の高齢化や受講生減少で閉講されるものがある一方、新たな講座も次々と開講され、受講生・会員を獲得する努力は続けられている。

なお、このような講座のほかに、塾全体の会員を対象としたイベントが開催される。現在、定期的に開催されているイベントには「カラオケお楽しみ会」「シニアのお祭り」「クリスマス会」「バスツアー」がある。いずれも、講座にかかわらず会員どうしが交流を深める趣旨で催されている。

## ②運営体制

くすのき塾の現在の役員、執行部体制、会議は図表 2-12 のとおりである。理事は会員の中から選ばれ2年任期となっている。理事長と副理事長は理事の中から互選される。

お騒がせ応援隊は、上記のイベントを企画運営するためのチームで、多数を占める女性会員の意向に沿ったイベント実施によって会の活性化を図ろうと、2012（平成24）年につくられた。現在女性8人で構成されている。

ナビ・スタ会議は、講座・教室のナビゲーターとスタッフを招集して開くミーティングで、講座間の連携を取り、塾本部との情報交換を促進する目的で開催されるようになった。

このように、組織や運営体制が会の発展とともに柔軟に変更されながら今日に至っている。

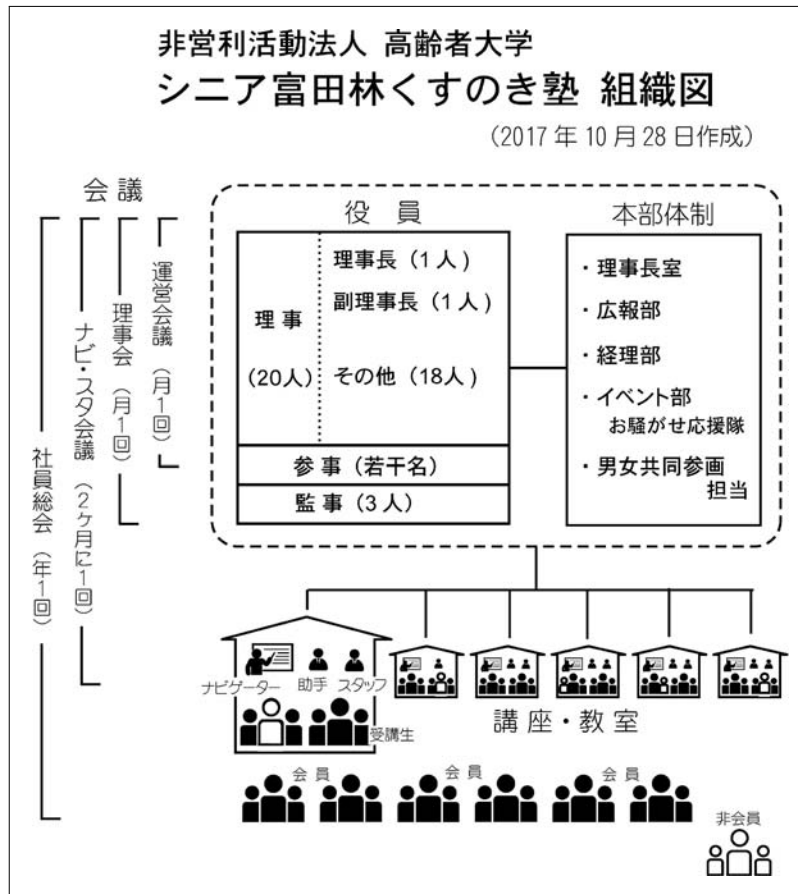
## 2. 会員アンケート調査から

くすのき塾では発足から15年となる2016（H28）年2月に全会員529人を対象としたアンケート調査を行った。回収数は247件で、回収率は46.7%だった。調査用紙と集計を文末に掲載する。

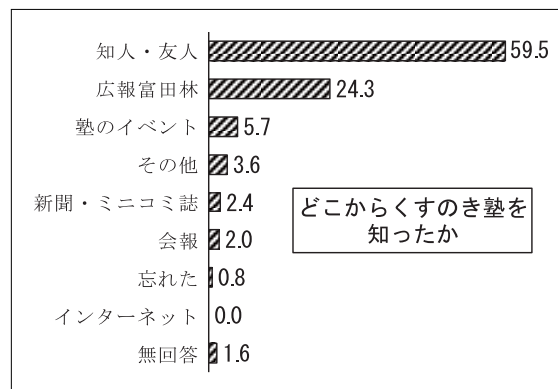
この調査から読み取れるくすのき塾の姿を拾い上げる。

### ①人的交流を通じた学習情報

くすのき塾の存在を知ったのは、約6割の人が「友人・知人を通じて」と答えている。この団体の広報PRの仕方が不十分という側面も窺えるが、会員の多くは、すずでもっている人的な繋がりを通じて、学習に関する情報を得ていることがわかる。（図表 2-13）



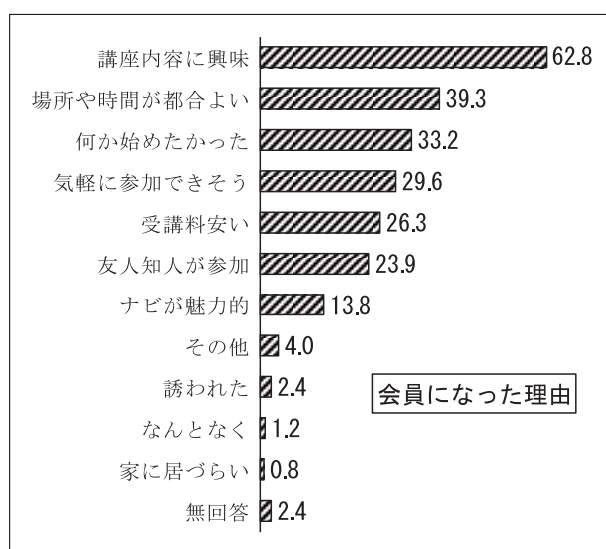
図表 2-12 くすのき塾の組織と会議（くすのき塾会則より筆者作成）



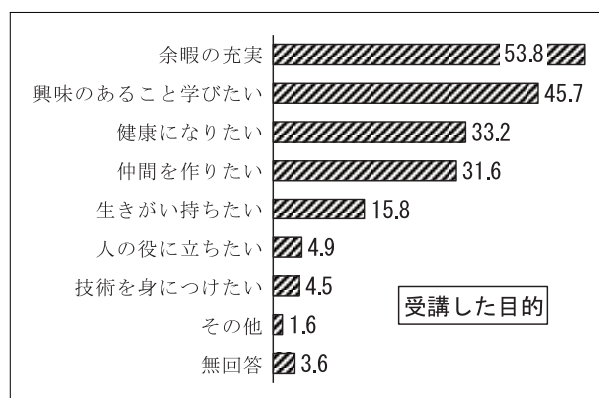
図表 2-13 アンケート調査結果 1

## ②学習を意識した入会・受講

しかし、会員になった理由では、「友人・知人が参加していたから」は 23.9% と比較的少なく、「講座内容に興味」が 62.8% で最も多い回答となっている（図表 2-14）。受講した目的を尋



図表 2-14 アンケート調査結果 2



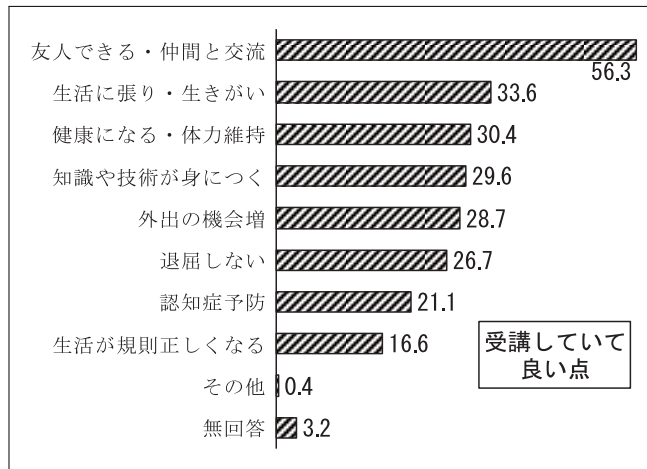
図表 2-15 アンケート調査結果 3

ねる質問でも、1位が「余暇の充実」53.8%、2位が「興味のあることを学びたい」45.7%で、なんとなく、あるいは何でもいからというのではなく、講座の中身を吟味した上での入会や受講が多数である。このあたり、福祉政策としての学習活動であっても内容が重要な意味を持つことがわかる（図表 2-15）。

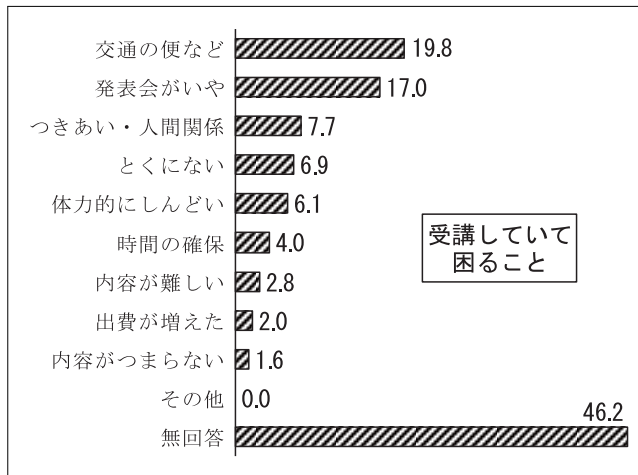
### ③受講の結果としての交流拡大

上記②の結果に反しているように見える回答が「受講していて良いと思う点」（図表 2-16）に現れている。ここでは「知識や技術が身につく」という学習本来のメリットが29.6%の回答だったのに対して、1位は「友人ができる・仲間と交流」56.3%、2位が「生活に張り・生きがい」33.6%、3位「健康になる・体力維持」30.4%と、副次的にもたらされる恩恵が上位を占めた。受講生は講座の学習内容が身につくことは当然のこととして受け入れながら、結果的に得ら





図表 2-16 アンケート調査結果 4



図表 2-17 アンケート調査結果 5

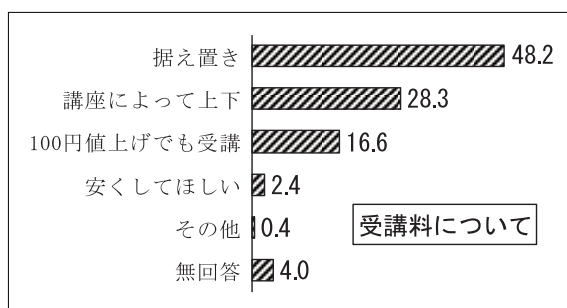
れる周辺的なことがらにも大きな魅力を感じている。

#### ④無理のない学習活動

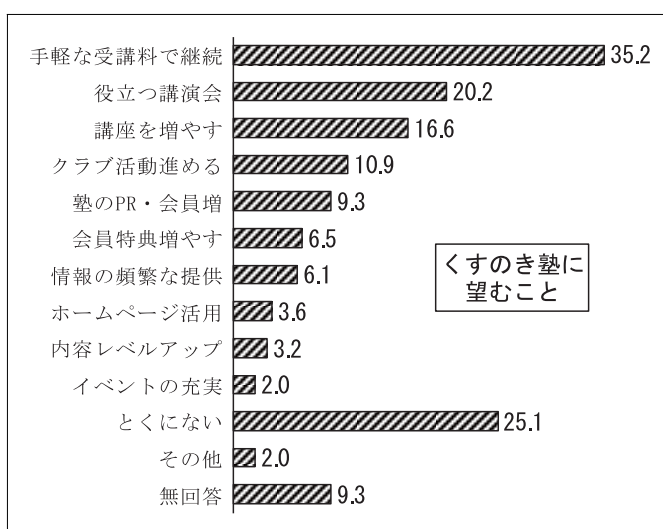
「受講していて困ること」には「とくにない」という回答選択肢の設定が欠落していたので、そのように明示的に回答した人は少なかったのだが、46.2% と半数近い人がどの回答も選ばず無回答であったことは、学習活動を阻害する要因があまり感じられていないと解釈することができる。物理的な障害の少ない範囲で講座を選択し、無理のない条件で受講を続けている会員の姿が浮かぶ（図表 2-17）。

#### ⑤受講料値上げを容認

くすのき塾講座の料金設定は、会員ならば 1 回当たり 400 円と、格別に安いのだが、受講料について尋ねた結果は、「このまま据え置いてほしい」が 48.2% で 1 位だった（図表 2-18）。次



図表 2-18 アンケート調査結果 6

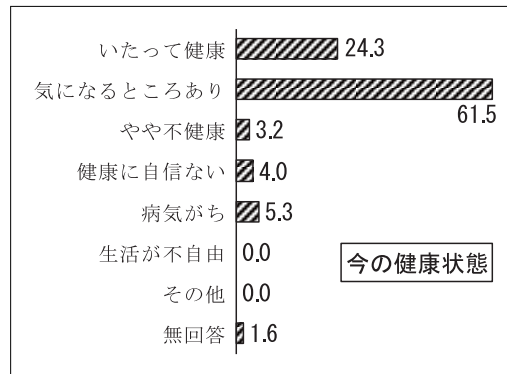


図表 2-19 アンケート調査結果 7

の間「くすのき塾に望むこと」でも「手軽な受講料で継続」35.2%が最も多かった（図表 2-19）。受講料が安いほどよいと考えるのは当然ではある。しかし、にも関わらず、受講料について、「100円値上げしても受講する」16.6%、「講座によっては値上げ・値下げしてもよい」28.3%が一定数選ばれていることは、くすのき塾の価値が安く手軽な受講だけではないと認められていることを示すものであろう。

#### ⑥元気なシニアの居場所

会員自身の健康状態をきく質問では、「いたって健康」24.3%と「気になるところあり」61.5%が大多数を占めた（図表 2-20）。くすのき塾会員は比較的健康な人がほとんどである。もともと元気だから入会したという側面と、活動しているから元気が続いているという両面が考えられるが、いずれにしても元気なシニア層の活動の場として、くすのき塾が大きな存在であることには違いない。



図表 2-20 アンケート調査結果 8

### Ⅲ 目指すべき高齢者の学習のカタチ

「大人も学んでよい」から始まった生涯学習社会であるが、それは単なる個人の生きがいとしての学習活動から「知の循環」へと、多くの人々の努力によって前進してきた。一方で、わが国における超高齢社会の到来は、かつて高度経済成長期・1億総中流と言われた時代に、行政から手厚いサービスを受けることを当然として、ある意味自立力を培うことができなかった世代の高齢化と同時進行している。そのような高齢者の自立に向けた意識転換は、若い世代の負担を軽減するためにも不可欠であるが、それは簡単なことではない。

くすのき塾は、こうした状況の中、16年も前に公的支援からの自立を見事に果たし、知の循環を伴う学びの場を創造し、現在まで継続している。行政への依存を「ナニクソ精神」で乗り越え、協働の中で学びを創造し提供し続けているくすのき塾の成果を、今後の自立的知的循環の広がりのために整理したい。

#### 1. くすのき塾成功のポイント

くすのき塾が成功したポイントを、ここでは4つの観点から整理してみる。

##### (1) 社会的課題への呼応

- ①団塊の世代が大挙して定年退職を迎える時期に「シニアリーダー養成講座」が企画された。
- ②その養成講座の趣旨を富田林市が地元の課題であると認識し、開催を決定した。
- ③住民の中に、くすのき塾のような高齢者大学を求めるニーズがあった。

##### (2) 社会教育活動の原点を継承

- ①くすのき塾の講座では、教える側も学ぶ側も会員であり、ともに学び合う関係が構築されている。
- ②くすのき塾では、過去の所属や肩書きを捨て、対等な一市民どうしの立場で集うことが暗黙のルールになっている。

- ③くすのき塾は設立当初から政治的・宗教的活動はしないことを方針に掲げて、実行している。
- ④くすのき塾の中での人間関係はジェンダーフリーである。男女の別なく、個々の特性と能力に応じた活躍の場をもっている。

### **(3) 活動を支えた環境と行政**

- ①自主的活動を建前とはしながらも、くすのき塾の起ち上がり時期には行政が一定の支援を行っていた。
- ②くすのき塾の誕生と成長には、教育委員会の社会教育課と市長部局の健康福祉部福祉課が共同で関わってきた。
- ③くすのき塾と行政との間には、一定の緊張関係と同時に協力関係もあって、それらが良い方向に働いてきた。
- ④くすのき塾の教室確保にあたっては、富田林市で整備されてきた社会教育関係その他の公共施設の蓄積が役に立った。

### **(4) 高齢者の特性を生かした運営**

- ①団塊の世代の持つエネルギーが、シニア世代の学習活動に向けて発揮され、くすのき塾の誕生に結びついた。
- ②くすのき塾が短期間のうちに機構を整備し多くの会員を集められたのは、運営メンバーたちが現役時代に培ったノウハウをそこに注ぎ込んだからである。
- ③くすのき塾の活動はボランティアを旨としつつも、一つの企業体として経営的視点もしっかりと持ち合わせている。
- ④くすのき塾では、講座内容に制限を設けず、さまざまな講座を開いてきた。柔軟な運営ポリシーも活動が長続きしている要因の一つである。
- ⑤塾の運営に携わる役員たちは、自分たちの力で組織やイベントを作ることに喜びを見出している。そこには、個人的な余暇活動の域を超えたやりがいが見出されている。

## **2. くすのき塾の成果とこれから**

前節で整理した項目を踏まえ、とくに重要と思われることがらについて、成果を活用する観点から考察する。

### **(1) きっかけの重要性**

社会的ニーズに応えて何かをしたいと思っても、一人では難しい。ましてや地域のリーダーとして、新しい自立的な取り組みを創造するためには、同じ志をもった人達の出会いとスキルの養成が必要になる。

#### **①課題の発見ときっかけの提供**

2000（平成12）年当時の富田林市教育委員会社会教育部には、団塊の世代が大挙して定年退職を迎える時期の重要性を認識し、大阪府の呼びかけに敏感に反応できる管理職がいた。その結

果、前章で詳述しているように「シニアリーダー養成講座」が実現し、くすのき塾の誕生へつながった。また、養成講座の準備段階から、教育委員会社会教育課と健康福祉部福祉課が共同で事業を進める形を取ったことで、共通する課題・対象に教育委員会と市長部局それぞれのセクションが協力体制を取れたことも、その後の支援や展開に大きな意味をもった。

## ②知の循環へスキル養成

『平成 12（2000）年度シニアリーダー養成支援事業報告書』は、この事業の目的を「「学ぶ」「交流する」「見る・歩く」「挑戦する」を基本概念とした各種イベント等の企画・立案・実施等に携わるシニア（イベント）リーダーを養成することにより、高齢者の生きがい健康づくりを支援し、またイベント等参加者自身にも生きがい健康づくりについて考える機会を提供するとともに、人脈の形成及び相互の交流促進を図る。」としている。その後、生涯学習社会を進展させるため、2008（平成 20）年に中央教育審議会から「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～」の答申が出されるが、この数年前から、富田林市を舞台に知の循環創造につながる具体的な取り組みが始まっていたことに驚かされる。

## (2) くすのき塾誕生と継続に学ぶ

### ①行政との関係

自立が前提のくすのき塾ではあったが、立ち上がりの時期に、行政の支援が全くなかったわけではない。中でも、くすのき塾講座の受講生募集記事を市広報誌に毎月掲載し、公的施設の活用について相談にのるなどの協力は重要であった。その後、自立的な運営が定着してからのくすのき塾は、自立する市民団体として、適度な緊張感を持ちながら行政と対等に意見を交わし協働する関係を形成している。

### ②協働を可能にした運営

来る者を拒まず、去る者を追わない。政治的な中立を保ち、過去の経歴を一切問わず、柔軟な運営姿勢と役割分担の中、相互を尊重する。メンバーが、知恵を出し合い、楽しみながら組織を支え、イベントや講座を作っていく。

この方針が、公民館講座やカルチャーセンターで学ぶ（受け身）だけでは得られない、メンバー同士の運営や講座における協働のプロセスを通したもう 1 つの学び（主体性）を可能にしている。

### ③蓄積を活かした運営

くすのき塾の原動力は、「ナニクソ精神」で発足に参画したシニア世代住民のやる気であり、団塊の世代の持つエネルギーが市民公益活動に向けて発揮された成果である。その人たちが現役時代に培った技能は、とりわけ塾の運営面に活かされている。中心となったメンバーたちは、発足準備から活動開始初期の短期間で、規則と役職を定め、会計ルールを決め、各種書類の様式を整備して一つの企業体を形作った。また、資金面でもこの立ち上がりの時期に、アイデア力と企画力を結集し、イベントを実施することで大きな蓄えを生み、その後の経済的自立の土台を形成した。

そこには、日本の企業を支えてきた労働者のノウハウが遺憾なく注ぎ込まれている。「遊び心で学習ごっこ」がくすのき塾のモットーだが、それを做って表現するなら、塾の運営は良い意味での「会社ごっこ」となっている。

役員の間で共通認識となっているルールに「塾の仕事は無償ですが、かかった実費はきっちりもらう」がある。これも、活動継続を担保する理念の一つである。

このように、現役時代に積み上げた経験とノウハウが、定年後に地域で活かされていることも重要である。学びへの参加だけでなく、学びを支える側にニーズがあることをアピールすることで、これまで参加してもらえなかった層の呼び込みにつながる可能性が広がる。

#### ④循環を生む講座の仕組み

くすのき塾では講座に参加者（受講料）が集まらなないと、その講座は継続しない。このシステムは一見シビアに見えるが、裏を返すと、メンバーのニーズが反映されやすく、ナビゲーターと学ぶ人の緊密なコミュニケーションの中で、より魅力的な講座展開も可能となる。またメンバーの誰もがナビゲーターやスタッフになる可能性があることで、受け身ではない学びの循環が作られている。

くすのき塾の活動の中で常に苦勞の種になっているのが、講座の開催場所（教室／部屋）の問題である。受講生が集まりやすい部屋をいかに安く確保するかがいつも役員の手を悩ませている。しかし、富田林市には社会教育分野をはじめとして、公共施設のストックが一定整備されていた。その物理的な蓄積を活用してくすのき塾の活動が展開されてきた。

### (3) 超高齢社会へくすのき塾の成果を活かす

ここまで、高齢者の学習活動実践のあり方についてくすのき塾を例に見てきた。これを踏まえ、超高齢時代を迎えたわが国において高齢者がいきいきと活動を続けていくために必要なことがらを、いくつかのポイントにまとめてみたい。図表 3-1 は、そのポイントをイメージ化したものである。

#### ①団体誕生に必要な行政の役割～きっかけ提供とスキル養成

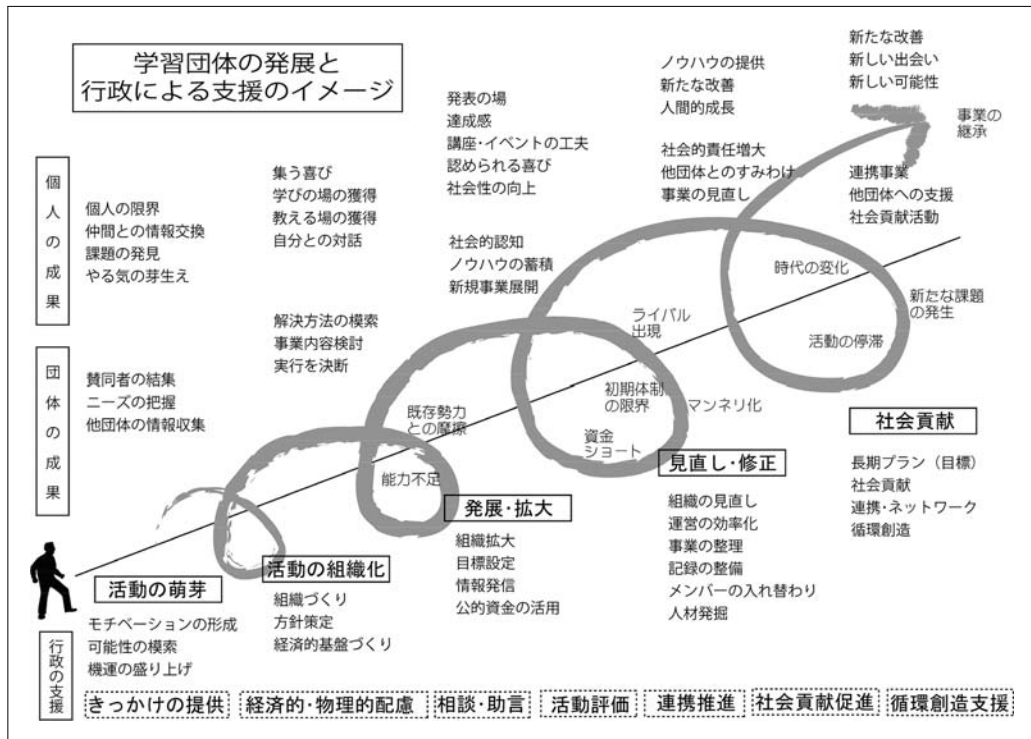
地域に貢献しうる自立的な団体が自然発生的に誕生することは稀であろう。行政が財政難で、住民に多くサービスを提供できない今だからこそ、行政には住民パワーを引き出し、主体的なまちづくりを自立的に展開できるように後押しする力が問われる。

くすのき塾誕生のきっかけにも見られるように、地域の課題へと住民の意識を向け、行政の限界を理解してもらう中で、自立的な関わりの重要性に気づき、仲間と共に一歩踏み出す流れの創造と、その後の支援が行政にとって重要であると言える。

#### ②団体の発展と継続

##### ア. 運営的側面～相互に知恵と経験を尊重し合う関係と主体的関わり

高齢者には各々、その人生の中ですでに蓄積された知恵と経験がある。団体の運営や学習提供などの場面に、その蓄積を活かす機会が提供されているかどうか、高齢者を呼び込み、また活動を継続させるうえで大きな要因となる。そのことは、活動する人の心理に大きく作用する。高



図表 3-1 学習団体の発展と行政による支援のイメージ図 (2017 年 10 月筆者作成)

高齢者にとって、これまでの人生を通して得た知識や経験が、再度必要とされ他者に有用な影響を及ぼすことは、大きな喜びとなり自己肯定感・自信の形成につながる。

#### イ. 事業的側面～仲間と共に知の循環をつくりその成果を社会貢献へ

1 人の学びや 1 つの講座の成果を点で終わらせない仕掛けとして、成果の発表や交流につながる楽しいイベントは重要である。また、その成果が新しい人の呼び込みや次の社会貢献にもつながりうる。

発表・イベントや社会貢献は、目に見える目標となり、適度な緊張感から学習効果を上げ、共通の目標達成のために仲間との協働が促進される。

#### ウ. 他の団体との連携・次世代育成～新しい可能性や関係に関心を持ちつつバトンタッチの準備

自分たちの活動に新しい人達を巻き込むためにも、常に地域の課題解決に関心を持ち、自分達以外の団体とも交流する姿勢が大切である。また、組織としての継続を担保するために、常日頃から次世代育成を意識し、運営の仕組みを工夫することが重要となる。

#### ③これからの課題

今後もくすのき塾のような団体が事業を継続し、より充実してゆくための課題について、とくに人的側面に焦点を絞ってあげる。それらは、学習活動を行う他の団体にも共通するところが多いと思われる。

- ア. 後継者の育成……数人の創設メンバーが中心となって一気に拡大した団体では、後継者が育ちにくい傾向がある。創設メンバーは組織を発展させるだけではなく、後継者育成も一つの仕事と考えてバトンを渡す準備をしなければならない。
- イ. 仕事の分担……多くの仕事をこなせる特定のメンバーに仕事が集中しやすいのは、どんな組織においても見られる現象だが、ボランティア団体の場合とくに、個人の好意に寄りかかって業務の偏りがいっそう生じやすい。業務分担の偏りは長い目で見て、事業の継続性に必ず問題をもたらす。仕事の結果も無視はできないが、ボランティアのしかも学習活動に関わる団体であれば、その過程に参加することにこそやりがい存在する。時として出来上がりのクオリティーや早さには目をつぶってでも、より多くのメンバーで仕事を分け合うことに意味があることを認識して役割分担を考える必要がある。
- ウ. シニアの地域デビュー促進……高齢期を迎えてからボランティア活動や学習活動に参加することが容易な人もいれば、簡単にはいかない人もいる。とりわけ、他の地域に通勤していた企業人が、退職後に自宅のある地元で人間関係を築くことには苦労がともなう。現在、その傾向はとくに男性に多く見られているが、勤務形態に男女差がなくなりつつある今日、女性にとっても同様の問題である。シニア世代の地域活動への参加を促すことは、地域全体にとっての福祉政策であるとともに、団体にとっては自分たちの仲間を増やし、後継者を見つけ育てるための取り組みでもある。また、退職後の地域デビューは、企業内部でも社員の福利厚生の一環として対策が講じられるべき課題である。
- エ. 他団体との交流……団体は単独で活動しているよりも、他の団体と交流を図る方が輝きを増す。それは、取り組みに幅や深みが出るというだけではなく、問題を抱えた時に相談相手になり、解決の糸口にもなるという側面がある。交流の相手は、よく似た事業内容に限らず、むしろ違った活動内容の団体の方がより大きく刺激し合う場合もあり得る。こうした交流は団体自身が相手を探すと同時に、仲立ちとなる行政や支援組織の果たす役割が大きい。

バブル崩壊以後、財政難を理由に地域住民は突然自立を迫られ、多くはまだ戸惑いの中にいる。少子高齢化の進む中、若い世代の負担を減らすためにも「昔はよかった」と懐かしんでいる場合ではない。くすのき塾のメンバーは、日々活発に交流し忙しく活動している。認知症もロコモティブシンドロームも逃げ出しそうなそのパワーは、さらに団体内外の多くの人達に影響を及ぼしている。

できるだけ長く元気で老後を過ごし、長患いをしないで最期を迎える「ぴんぴん・ころり」がよく言われるが、これからは「ぴんぴん・ころり」ではもったいない。さらに健康寿命を延伸させるためにも、高齢者には、できるだけ長く元気に、仲間と共に社会で輝く「ぴんぴん・ピカピカ・ころり」の広がりを期待し、それを支える社会の実現を願う。



注・参考文献

- (1) 『富田林市第4次総合計画』2007（平成19）年3月第1章第2節（1）P.4（左）・（3）P.14の図より
- (2) 日本老年学会ウェブサイト [http://geront.jp/news/pdf/topic\\_170106\\_01\\_01.pdf](http://geront.jp/news/pdf/topic_170106_01_01.pdf)（2017年11月8日確認）
- (3) 財）大阪府地域福祉推進財団『平成12年度シニアリーダー養成支援事業報告書』2001年3月
- (4) 堀薫夫『教育老年学の構想－エイジングと生涯学習－』学文社、1999年
- (5) 波多野完治『社会教育の新しい方向－ユネスコの国際会議を中心として』日本ユネスコ国内委員会、1967年  
波多野完治が、ラングランの読み上げたワーキング・ペーパーを全文翻訳し解説をつけたもの。  
1970年、波多野完治はラングランの『生涯教育入門』を財全日本社会教育連合会から翻訳出版している。
- (6) 中央教育審議会答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1216131\\_1424.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1216131_1424.html)（2017年11月8日確認）
- (7) 清見潟大学塾『新静岡市発 生涯学習20年－自立型長寿社会へのアプローチ』学文社、2004年  
清見潟大学塾 <http://www.kiyomigata.sakura.ne.jp/>1（2017年11月8日確認）

## くすのき塾発足 15 周年 会員アンケート調査 用紙と回答集計

※選択肢の後の数字は回答数（総回答数：247）

## 1. 初めてくすのき塾を知ったのはどこからですか。（いずれか一つ）

- ア) 広報とんだばやしの記事で **60**    エ) 知人・友人から教えられて **147**    キ) 忘れた・思い出せない **2**  
 イ) 新聞やミニコミ誌を読んで **6**    オ) 塾のイベントを見て **14**    ク) その他 **9**  
 ウ) インターネットの情報を見て **0**    カ) 塾の会報を読んで **5**    ※無回答 **4**

## 2. 会員になった（または受講した）のはどうしてですか。（回答はいくつでも可）

複数の講座を受講されている方は、最初に参加された講座についてお答えください。

- ア) 講座内容に興味があるから／面白そうだから **155**    キ) 友人・知人が参加しているから **59**  
 イ) 場所や時間が都合よいから **97**    ク) 何かを始めたいと思っていたから **82**  
 ウ) 受講料が安いから **65**    ケ) 強く誘われたから **6**  
 エ) 気軽に参加できそうだから **73**    コ) なんとなく **3**  
 オ) ナビゲーター（指導者）が魅力的だから **34**    サ) その他 **10** ( )  
 カ) 家に居づらいから／外へ出たいから **2**    ※無回答 **6**

## 3. くすのき塾の講座を受講した目的はどんなことですか。（回答はいくつでも可）

- ア) 余暇を楽しく充実して過ごしたい **133**    オ) 生きがいをもちたい **39**  
 イ) 興味・関心のあることを学びたい **113**    カ) 仲間を作りたい／人とふれあいたい **78**  
 ウ) 自分の役に立つ技術を身につけたい **11**    キ) 人の役に立ちたい／社会に貢献したい **12**  
 エ) 健康になりたい／健やかに過ごしたい **82**    ク) その他 **4** ( )    ※無回答 **9**

## 4. 受講していて良いと思うのはどんなことですか。（回答はいくつでも可）

- ア) 知識や技術が身につく **73**    カ) 退屈しないですむ／余暇活動になっている **66**  
 イ) 健康になる／体力が維持できる **75**    キ) 生活に張りができる／生きがいが持てる **83**  
 ウ) 友人ができる／仲間との交流が楽しい **139**    ク) 外出の機会が増える／家にこもらないようになる **71**  
 エ) 生活のリズムが規則正しくなる **41**    ケ) その他 **1** ( )  
 オ) 認知症予防・介護予防に役立つ **52**    ※無回答 **8**

## 5. 受講していて困るのはどんなことですか。（回答はいくつでも可）

- ア) 受講時間を確保するのに苦勞する／忙しくなる／近所づきあいが減った **10**  
 イ) 出費が増えた／受講料や活動費・交通費を出すのに苦勞する **5**  
 ウ) 人とのつきあい方・人間関係に困ることがある **19**  
 エ) 会場・教室へ出掛けて行くのに苦勞する（交通の便など） **49**  
 オ) 講座の内容が難しい／ついていけない／なかなか上達しない **7**  
 カ) 講座の内容がつまらない／レベルアップしたい／面白くない **4**  
 キ) 発表会への出演が面倒だ／おっくうだ／恥ずかしい **42**  
 ク) 体力的に参加するのがしんどくなっている **15**  
 ケ) その他 **0** ( ) ←※とくにない **17**    ※無回答 **114**

## 6. くすのき塾の講座受講料について、どの考え方に賛成ですか。（いずれか一つ回答）

- ア) 当面、今のまま据え置いた方がよい（1人1回につき非会員500円／会員400円） **119**  
 イ) 100円程度なら値上げしても続けて受講したいと思う **41**  
 ウ) 原則は今のまま据え置き、講座によっては値上げまたは値下げするものがあるのもよい **70**  
 エ) 今よりも安い受講料にしてほしい **6**  
 オ) その他 **1** ( )    ※無回答 **10**

## 7. 今後、くすのき塾に望むのはどんなことですか。次からいくつでも選んでください。

- ア) さまざまな分野の講座をもっと増やしてほしい 41  
 イ) 講座内容のレベルアップを図ってほしい 8  
 ウ) 手軽な受講料で気軽に受講できる講座を続けていってほしい 87  
 エ) イベントをもっと充実させてほしい 5  
 オ) 講座とは別に会員が交流できるようなクラブ活動を進めてほしい 27  
 カ) シニア世代の実生活に役立つ講演会などを開催してほしい 50  
 キ) 講座やイベントの情報をもっと頻繁に会員・受講生に届けてほしい 15  
 ク) ホームページを活用して情報発信してほしい 9  
 ケ) 会員の特典をもっと増やしてほしい(割引で買い物ができるなど) 16  
 コ) 塾の PR をもっとおこない、会員を増やしてほしい 23  
 サ) とくにない 62  
 シ) その他 5 ( ) ※無回答 23

## 8. あなたが現在、受講されている講座をすべて選んでください。

- ア) パソコン 4 オ) 川柳 17 ケ) ヨーガ 19 ス) 民舞踊 3 チ) ハワイアンフラ 18  
 イ) 手編み 15 カ) 言の葉遊び 9 コ) 太極拳 6 セ) 折り紙 2  
 ツ) 癒しの音楽と健康体操 9 ウ) 陶芸 9 キ) 歌謡教室 46 サ) 気功 9 ソ) 健康麻雀 30  
 テ) ニシキデ教室 7 エ) 歴史講座 35 ク) 歌声教室 45 シ) 3B 体操 15  
 タ) 実用習字 12 ト) その他 6 ※無回答 17

## 9. あなたはくすのき塾に加入して何年たちますか。(いずれか一つ回答)

- ア) 2 年未満 36 イ) 2～4 年 70 ウ) 5～10 年 82 エ) 11 年以上 49  
 オ) 覚えていない 6 ※無回答 4

## 10. あなたの性別と年齢をお答えください。

- ア) 男 51 イ) 女 178 ※無回答 18 年齢 ( ) 才

## 11. あなたが現在、同居している家族に○をつけてください。(あてはまるすべてを回答)

- ア) 配偶者 180 イ) 子 71 ウ) 孫 15 エ) ひ孫 0 オ) 親 5 カ) 一人暮らし 43  
 キ) その他 1 ※無回答 6

## 12. あなたの今の健康状態はどれが一番近いですか。(いずれか一つ回答)

- ア) いたって健康である／悪いところはない 60 エ) 健康に自信がない／体力が弱い 10  
 イ) 気になるところはあるが生活に支障はない 152 オ) 病気がち／つねに医者にかかっている 13  
 ウ) やや不健康である 8 カ) 病気や障がいなどで生活が不自由 0  
 キ) その他 0 ( ) ※無回答 4

## 13. あなたが今「自分の生活について満足している水準」を 10 段階で示してください。

(どれかの数字に○)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----

## 14. くすのき塾へのご意見・ご要望などありましたら、自由に記入してください。

※記述あり 46 ※無回答 201

………… アンケートは以上です。ありがとうございました。…………